

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：23401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K21277

研究課題名(和文) 視覚動詞と条件命令文の比較対照研究

研究課題名(英文) A comparative study of verbs of visual perception and conditional imperatives

研究代表者

森 英樹 (MORI, Hideki)

福井県立大学・学術教養センター・准教授

研究者番号：20534671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語・英語・中国語・韓国語の視覚動詞と条件命令文のデータを収集し比較対照を行った。中でも日本語と英語に関して、試行を表す視覚動詞の「Vてみる」は英語では必ずしも「try」を含む表現に対応せず単独動詞で訳される傾向があること、「Vてみる」は現実性を表すモダリティ的表現であること、日英語の命令法の文法カテゴリーの相違から日本語の条件命令文で視覚動詞の付加が義務的となることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study compared and contrasted verbs of visual perception and conditional imperatives from several languages such as Japanese, English, Chinese and Korean. The findings about Japanese and English are: V-te-miru which has a conditional meaning tends to correspond to a single verb in English instead of a complex expression; V-te-miru is one of the modal expressions meaning realis; and the difference in the grammatical category of imperatives between Japanese and English explains why Japanese conditional imperatives must co-occur with the verb of visual perception.

研究分野：日英対照言語学

キーワード：視覚動詞 条件命令文 試行性 モダリティ アスペクト

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語における視覚動詞の類型論的な位置づけ

視覚が人間の知覚のなかでも極めて重要であることを踏まえると、世界諸言語における視覚動詞の果たす役割を言語学的に考察するのは興味深いことである。視覚動詞の研究として、形態統語的な分類法の他に多義性に基づく意味論的アプローチがある。日本語の視覚動詞に関して、英語で書かれている研究がそれほど多くなかったため、類型論的な観点から、日本語の視覚動詞およびその補助動詞用法が十分に検証されてきたとは言い難い。

(2) 「V てみる」が条件の意味を持つことの特異性

日本語の視覚動詞の場合、「V てみる」という補助動詞の形式のとき文法化によって意味が多様化する。試行性のニュアンスがその代表的な意味であるが、本研究にとって、「V てみる」という命令形のときに条件の含意も生じる点が注目される。視覚動詞に関する先行研究と照らし合わせると、この条件性は日本語の特異性とも言えるため、条件性が含意される詳細なメカニズムだけでなく理論的な裏付けが求められる。

(3) 日英語の条件命令文の比較対照

命令形が命令ではなく条件の意味を持つという点で、日本語の「V てみる」条件命令文は構文と言える。英語の条件命令文でも命令形が条件の含意を持つが、「命令形 and 平叙文」という構造を持つ。すなわち、日英語の条件命令文は、接続詞の有無、視覚動詞の有無という点で異なっている。個別言語の条件命令文を扱った記述的な研究はなされてきたものの、日英語の条件命令文の異同について包括的かつ原理的な説明としては十分とは言えない。

(4) 日本語の条件命令文における視覚動詞の共起性

命令形以外の「V てみる」では、本動詞と視覚動詞の共起は任意であり、視覚動詞が共起しない場合でも試行のニュアンスが付加されないだけで、全体の基本的意味が変わることはない。しかし、条件命令文の「V てみる」では、視覚動詞が共起しないと文意が逆転してしまい、条件命令文として成立しなくなる。視覚動詞本来の視覚的意味と条件の意味との関連性、および視覚動詞が条件命令文で必須要素となる理由について統一的な説明が必要である。

2. 研究の目的

(1) 日本語の視覚動詞の意味拡張と多義性

先行研究に基づいて、日本語の視覚動詞の意味拡張と多義性を再確認する。日本語学の実験分野で、視覚動詞に関する研究は十分蓄積さ

れているため、それらを整理分類しながら、類型論的な観点から、日本語の視覚動詞の持つ一般性と特異性を明らかにする。特に、他言語において、既に知られている禁止や警告の標識として用いられる命令形の視覚動詞の用例との関連性を考慮に入れながら、意味拡張が広範で条件の意味を発達させた日本語の特異性に注目する。

(2) 他言語との比較対照

日本語の視覚動詞を、英語、韓国語、中国語と比較対照させて諸特徴の異同を浮き彫りにする。その際、先行研究で用いられた形態統語的な分類(表1)と日本語の「V てみる」の動詞連結構造を軸とした意味拡張による分類(表2)と条件命令文の具現化の分類(表3)に基づき、言語ごとの視覚動詞の意味分布を考察しながら言語間の異同を明らかにする。そして、視覚動詞に条件の意味が存在すれば、試行の意味は必ず存在する、というような視覚動詞に関する含意的普遍性を体系的に探る。

表1: 視覚動詞の形態統語的特徴

視覚動詞 (本動詞)	動作	知覚	推量
日本語	見る	見える	(に)みえる
英語	look	see	look (like)
韓国語	poda	poida	poda
中国語	kan	kan (jian)	xiande

表2: 視覚動詞の意味拡張 (対応する動詞連結構造が英語にはないため直接比較しない)

視覚動詞 (補助動詞) の意味拡張	言語の例
試行 (「食べてみる」)	日、中、韓
視点 (「終わってみれば何でもない」)	日、中
条件 (「動いてみる、撃つぞ」)	日

表3: 条件命令文の具現化

条件命令文に相当する形式	言語の例
命令文のみ	英、中
命令文に別の要素 (視覚動詞) を付加	日
命令文以外の構文 (条件節等) を使用	韓

(3) 日本語の条件命令文で「てみる」が必要な理由

日英語における条件命令文の形式はそれぞれ「V てみる」と「命令文 and 平叙文」と

のように構造的に異なる。他の言語と違い、視覚動詞を省略できないという制約は日本語の特徴と言える。諸言語の先行研究の中で条件命令文に関する記述的、意味的な考察はあるが、視覚動詞の出現に注目した上で、日英語の構造上の違いと日本語で視覚動詞が必須となる理由を探った研究はない。そこで、本研究では日本語の動詞連結構造で使われる補助動詞「V てみる」が持つ試行のニュアンスに着目し、試行が含意する現実性（モダリティ的意味）の観点から、視覚動詞と条件命令文の共起性を論じる。これによって、日本語の条件命令文に見られる共起性制約をモダリティ研究の中に位置付ける。

(4) 条件命令文における条件のモダリティ性とアスペクト性

日本語では「V て V」という動詞連結構造内の視覚動詞によって事態の現実性（モダリティ的意味）が含意されるが、英語では命令文が「and」による連結構造に生起することで事態の結果（アスペクト的意味）が含意されるという日英間の相違に着目して、日英語の条件命令文における条件の意味をモダリティ性とアスペクト性の観点から論じる。その上で、試行性（モダリティ的意味）を含意する視覚動詞が日本語の条件命令文に出現する必要があることとの相関関係を探り、日本語特有の共起性制約に原理的な説明を与える。さらに、中国語のアスペクト標識「le」に条件命令文相当の節を作る機能があること等を踏まえ、日英語以外の条件命令文にも注目して、モダリティ・アスペクトの基準で言語類型論的な分類の適用可能性を探る。

3. 研究の方法

(1) データ・用例収集

視覚動詞に関しては様々な言語において研究があるため、先行研究で取り上げられた視覚動詞の用例を広範に収集して整理することから始めた。その際、既存の分類法（形態統語的な特徴・自他動詞の区別等）を念頭に置き、日本語の視覚動詞と諸言語における視覚動詞を比較対照できるよう諸特徴の把握に努めた。また、文献調査と並行して、辞書・コーパスも活用しながらより広範なデータ・用例収集を行った。

(2) 聞き取り調査

先行研究の文献調査や既存の辞書類で用例の見つからないものを中心に、対象言語の母語話者に対して聞き取り調査を行った。特に、初年度は在外研究でオーストラリアに滞在していたため、英語に加え、中国語（北京語・広東語）、韓国語、（外国語としての）日本語の視覚動詞の各用法について、対面もしくはメール等の手段で用例収集やインフォーマントチェックができた。また、最終年度には、韓国にて韓国語の命令形表現のデータを収集し使用実態調査も行った。

(3) 理論的背景の明確化

本研究は視覚動詞と条件命令文に焦点を絞った研究である以上、限定的で視野の狭い研究にしかならない恐れがある。これを防ぐため、関連領域とのインターフェイスを意識し、ミクロな事象を言語普遍的な概念と関連付け、先行研究との理論的整合性を見出すよう努めた。具体的には、視覚動詞の意味拡張を文法化研究の文脈で捉え、「V てみる」の試行や「V てみる」の条件の用法をアスペクト・モダリティ研究として位置付ける可能性を探った。

(4) 成果公表

特異な日本語データに関して研究発信を行い、言語類型論の文脈において日本語の視覚動詞や条件命令文の認識を高めるため、当初、海外での学会発表と学会誌への論文発表を計画していたが、研究期間内には実現できなかった。成果の公表としては、最終年度に、「V てみる」と英語対応表現の実証的な日英比較調査に基づく試行性のモダリティ・アスペクト的考察を森 (2016)としてまとめた。

4. 研究成果

(1) 他言語における視覚動詞と条件命令文の比較対照

視覚動詞を扱った文献調査や母語話者への聞き取り調査を通して、日本語以外の視覚動詞の用法についての理解を深めるとともに、先行研究では注目されてこなかった事象にも注意を払うことができた。研究対象である英語に関しては、先行研究で明らかになっていること以外の新事実の解明はできなかったが、日本語を中心とした英語、中国語、韓国語における条件命令文と関連事象を比較対照する用例を整理した。中国語と韓国語に関して具体的に明らかになった点は次の通りである。

中国語における視覚動詞を含む条件命令文相当表現

中国語に関して、「動詞の重ね型 + kan」という形式が条件命令文に相当する機能を持つことが明らかになった。この中国語の形式を日本語の条件命令文と関連付ける研究は本格的になされていないが、先行研究の用例を再考察することによって、日本語の条件命令文と同様の制約が課されている点が理解できた。例えば、「*Ni wang-wang」は不自然だが「Ni wang-wang kan (忘れてみる)」のように視覚動詞「kan」と共起すると文法的になるのは、「*忘れる」は不自然だが「忘れてみる」にすると容認性が上がるという日本語に見られる事象と並行的に捉えられる。ただし、中国語の動詞は、日本語と違って命令形の語尾がないため、両言語の比較は慎重に行う必要はある。

韓国語における視覚動詞を含む条件命

令文相当表現

韓国語では、日本語同様、動詞連結構造で視覚動詞が試行の意味を表す用法「V poda」が存在し、それが命令形になって条件命令文相当の機能を果たす用例「Ku pang-ey isse posey(yo), khunq il napnita」(その部屋にいてみる、大変なことになる)を文献調査から特定できた。一方、今回の聞き取り調査から、日本語との相違点を考察するきっかけを得た。回答によれば、韓国語では「もし」に相当する語句を付加するのは不自然で、視覚動詞の命令形を仮定形にしても不自然にならない。これらは、日本語の条件命令文とは異なる特徴であるため大変興味深い。文法性判断の揺れもあるため、今後も調査を継続していく必要がある。

(2) 日英語の条件命令文に関する制約

本研究では、中国語や韓国語の用例も収集し比較対照を試みたが、特定の言語事象はそれぞれの言語の文法体系全体の中で考察する必要がある。また時間的な制約もあるため、条件命令文に関する詳細な考察は、日本語と英語の対照研究に絞って取り組んだ。明らかになったことは、試行を表す「V てみる」と対応する英語の表現は必ずしも「try」等を含む複合表現ではなく単独動詞が多いこと、「V てみる」はモダリティ的表現として理解できること、そして日英語における命令法の相違であり、これらを森 (2016)としてまとめた。具体的には次の通りである。

日本語の「V てみる」と英語のVの対応関係

「V てみる」条件命令文に含意される条件性の由来を探るため、試験的調査として『坊っちゃん』とその英訳を対照し、「V てみる」がどのような英語表現に対応しているかを調べた(表4)。この調査で実証できたことは、試行のニュアンスのみを持つ「V てみる」の表現は、英語ではVに相当する単独動詞で訳されるケース(例えば「寝てみた」が「lay down」)が多いということである(83例中53例)。これは、日本語の文法書や(外国語としての)日本語の教科書にある記述、視覚動詞の先行研究でも明確に指摘・議論されてこなかった点である。

表4：タイプ別「V てみる」と英語対訳

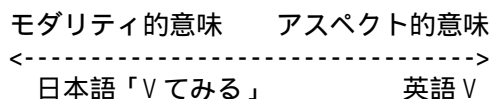
	A	B	C
	20	83	4
tryを含む英訳	0	14	0
try以外の英訳	13 + 4	53	2
その他	3	16	2

(A：視覚と試行を表す「てみる」、B：試行のみを表す「てみる」、C：行為や事態が実現したときの結果を表す「てみる」)

「V てみる」のモダリティ性

アスペクト研究でよく使用されるテストをヒントに、「燃やしてみたが燃えなかった」と「*燃やしてしまったが燃えなかった」の文法性の違いに注目した上で、「V てみる」が現実性(モダリティ)を含意するモダリティ的な表現であるという仮説を立てた。これによって「V てみる」の諸特徴を統一的に説明できるだけでなく、「V てみる」条件命令文をモダリティ研究の文脈で考察する理論的枠組みと、英語と対照する視座が与えられる。英語の「*I burned it, but it didn't burn」が不自然だが日本語の「燃やしたが、燃えなかった」は問題ないという事実から、英語では事態の完結性も動詞の意味に含意されることが分かる。また、上記で述べたように、「V てみる」は英語の単独動詞で対応可能であることを考え合わせると、英語の単独動詞が表しうる試行的ニュアンスは動詞の完結性(アスペクト)に由来すると考えられる。これに基づき、以下のようなスケールのな枠組み(図1)を提示して類型論的な一般化を行った。

図1：試行性の由来



命令法の文法カテゴリーの相違

日英語の条件命令文において、日本語は「V てみる」、英語は単独動詞で表現されるということは、そもそも命令法の文法カテゴリーが両言語で異なることを示唆する。このことを裏付けるため、予備調査として、広告表現等の命令形表現のデータ収集を行って日英対照を試みた。傾向として、英語の命令形は必ずしも日本語で命令形表現になるわけではなく、日本語の命令形の使用文脈は極めて限定的であるが、英語の命令形は広範に使用されることが確認できた。すなわち、英語の命令形の役割は動作内容を示すのが中心だが、日本語の命令形は命令の発語内効力と直結していると言える。重要なのは、この日英語の相違が、条件命令文の制約の違いと連関している点である。日本語の命令形は命令の発語内効力と直結するがゆえに、条件命令文では単独動詞では意味が矛盾してしまい(「Move and I'll shoot」は問題ないが「*動け、撃つぞ」は不自然)これを回避するための意味転化を担う要素として視覚動詞が必要であるという原理が明らかになる。

(3) 今後の展望

本研究では、視覚動詞と条件命令文の日本語、英語、中国語、韓国語の形態統語的特徴と意味機能の考察を行った。先行研究との整合性やアスペクト・モダリティ研究への関連付け等を意識して、視野の狭い研究にならな

いよう努めたが、今回の成果を類型論的な命令文研究のための土台として、今後の研究に発展させる。具体的には、まず、条件命令文に関する成果を他の典型的な命令文研究の中に位置付けた上で、より包括的な命令文研究として融合させる。また、本研究では、日本語の条件命令文は視覚動詞の付加が義務的であることに着目したが、同時に、視覚動詞の付加が不可能なタイプの命令形表現（「うそつけ」「馬鹿言え」等）との関連性を探っていくことは、本研究の知見を裏付ける意味でも重要である。そして、他言語との比較対照に関して、条件命令文の分析は日英対照が中心となったため、中国語と韓国語における対応表現に本分析がどれほど適用可能かを検証しなければならない。また、本研究は視覚動詞と条件命令文に限定されたものであったため、一連の知見を、調査対象とした各言語の文法体系全体の中でどのように位置付けるべきかを再考察する必要がある。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

森英樹、日英語の動詞表現が表す試行性：『坊っちゃん』の場合、福井県立大学論集、査読有、47、2016、1-17

6．研究組織

(1)研究代表者

森 英樹 (MORI, Hideki)

福井県立大学・学術教養センター・准教授

研究者番号：20534671